

## 日本キリスト教会大阪北教会

2017年2月19日 聖日礼拝説教 牧師 森田幸男

### 聖書 ヨハネによる福音書16章16節～24節

16「しばらくすると、あなたがたはもうわたしを見なくなるが、またしばらくすると、わたしを見るようになる。」17そこで、弟子たちのある者は互いに言った。「『しばらくすると、あなたがたはわたしを見なくなるが、またしばらくすると、わたしを見るようになる』とか、『父のもとに行く』とか言うておられるのは、何のことだろう。」18また、言った。「『しばらくすると』と言うておられるのは、何のことだろう。何を話しておられるのか分からない。」19イエスは、彼らが尋ねたがっているのを知って言われた。「『しばらくすると、あなたがたはわたしを見なくなるが、またしばらくすると、わたしを見るようになる』と、わたしが言ったことについて、論じ合っているのか。20はっきりしておく。あなたがたは泣いて悲嘆に暮れるが、世は喜ぶ。あなたがたは悲しむが、その悲しみは喜びに変わる。21女は子供を産むとき、苦しむものだ。自分の時が来たからである。しかし、子供が生まれると、一人の人間が世に生まれ出した喜びのために、もはやその苦痛を思い出さない。22ところで、今はあなたがたも、悲しんでいる。しかし、わたしは再びあなたがたと会い、あなたがたは心から喜ぶことになる。その喜びをあなたがたから奪い去る者はいない。23その日には、あなたがたはもはや、わたしに何も尋ねない。はっきりしておく。あなたがたがわたしの名によって何かを父に願うならば、父はお与えになる。24今までは、あなたがたは私の名によっては何も願わなかった。願いなさい。そうすれば与えられ、あなたがたは喜びで満たされる。」

### 説教 『求めなさい。そうすれば与えられる。』

◆私たちの北教会で今一番活気のあるのは日曜学校です。今年に入ってからでも新しい子供たちが次々と来ておりますし、私自身、毎回、子どもたちに教えられることがあります。先週も申し上げましたが、紙芝居は大体使い尽くしました。それで今日は、新約聖書の第1ページの『イエス・キリストの系図』の所1章1節～17節で説教しました。日曜学校の子供たちは、説教の途中でも、おかしいと思えば、すぐに反応します。アブラハムからダビデへ、そしてイエス様へと、カタカナの名前が続きます。舌嚙みそうな名前が続きますが、なんとか間違えないで読みました。それで、いつも一番先に口を開いてくれるのは中三の果歩ちゃんです。ところが、今日は果歩ちゃんが神妙な顔をして、説教をきいています。それで、さぐりを入れてみると、「実は私はこのページを去年、自分のノートに写しました」と言うのです。予想していなかった答えだったので、「へえー、なんでそんなことしたの?」と聞きますと、「聖書が分かりたいと思って写したの」と、そんなやりとりをしました。

◆新約聖書の第1ページです。そこに書くのですから、その後が続くもの、その前にあったもの、全てを念頭においてこの系図を書いているわけです。一人の名前に歴史と人生があります。アブラハムであり、ダビデです。そして、イエス様が処女マリアさんからお生まれになった。その間に私達もよく知らない名

前が続きます。この系図に出てくる一人一人に死と再生があり、その背景に歴史の滅びと回復があるわけです。「系図」が持つ意味深さが思われます。そんなことで今日の日曜学校は実に高度な日曜学校でした。子どもも一人前に苦しむのです。そして子どもは子どもなりに一人前に考えているのです。聖書は、これはもう大人と子供の枠を越えて、人間に真正面から語りかけているのです。今は、大人の礼拝ですが、本当に私たちはこの聖書という書物が与えられていることはどんな贈物よりも素晴らしい贈物というか、遺産を与えられているのだという事を本当に理解しているかということ、それこそ宝の持ち腐れにしていまっていないかを、子供から問われた思いが致しました。先日来繰り返して申しますが、今年はマルチン・ルターによる宗教改革から500年の記念の年です。当時、カトリック教会はカトリック教会なりの理解と伝統に従って教会を保持しておりました。そんな中で、ルターは聖書を原典で読んだのです。そしてルターは、聖書が語っていることと教会が教えていることの違い、落差に気付きます。それを、いわゆる「95か条の提題」の形で公言したのです。それが宗教改革のきっかけでした。そんな事で私達も聖書の命に豊かに与っていきたいと思います。

◆今日の箇所は、今読んでいただいておりますように、弟子たちはイエス様と数年、行動を共にして来ました。そして、彼らは「この方こそイスラエルを救うメシア＝救い主だと確信を強めて行きました。ところが今日の箇所では弟子達はイエス様の言われるこの事が分らなくなります。17節～18節です。「弟子たちのある者は互いに言った。『しばらくすると、あなたがたはわたしを見なくなるが、またしばらくすると、わたしを見るようになる』とか、『父のもとに行く』とか言っておられるのは、何のことだろう。イエス様と行動を共にし、道の業に参加してきた弟子たちが、最近イエス様のおっしゃることが何を言っておられるか分からなくなったわけです。19節以下にこうあります。「イエスは、彼らが尋ねたがっているのを知って言われた。『しばらくすると、あなたがたはわたしを見なくなるが、またしばらくすると、わたしを見るようになる』と、わたしが言ったことについて、論じ合っているのか。はっきりしておく。あなたがたは泣いて悲嘆に暮れるが、世は喜ぶ。」キリストの弟子たちは泣いて悲嘆に暮れるが世は喜ぶと言われます。イエス様の言動の核心は、一人一人を愛する事、一人一人を大事にする事で、この世を改めようとなさる所にあります。そのキリストを亡き者にされその追従者が悲嘆に暮れることを世が喜ぶ。しかし「あなたがたのその悲しみは喜びに変わる。」こう言われて女が子供を産むと時苦しむものだ。しかし、子供が生まれると一人の人間が世に生れ出た喜びのために、もはやその苦痛を思い出さないと、そういう身近な例を語られます。「ところで今、あなたがたは悲しんでいる。しかしわたしは再びあなたがたと会い、あなたがたは心から喜ぶことになる。その喜びをあなたから奪い去る者はいない。」こうおっしゃっています。それでも弟子たちはこのイエス様のお言葉について行けない。何のことか、具体的なイメージが浮かばないのです。

◆私たちは、イエス様がその後捕えられ、十字架にかけられるという経過を知っております。それは弟子

たちの誰一人思わなかった経過です。弟子達は、キリストとの関係が深いわけですが、それが敵方にわかると自分たちも同じ目に合うので、キリストとの関係を否認しますね。そのようにして正に彼らはどん底に落ちるわけです。それでこのような経過は、わたしたちは聖書のおかげで、この時点で弟子たちには見通しもつかなければ理解もできないようなことを、わたしたちは知っているわけです。これも聖書が与えられているからですね。そういう次第で、わたしたちはこの聖書という書物を与えられているので、神様のなさることの全容と言いますか、それを歴史として又個人史として、その死と再生、地獄と天国を、わたしたちは聖書によって知るわけです。

◆しかし、このように私たちに聖書が届けられたのは、弟子たちが本当に躓いて、絶望の淵に落ち、そこから再生、復活したからではないでしょうか。イエス様がおっしゃったように、「しかし、わたしは再びあなたがたと会い、あなたがたは心から喜ぶことになる。その喜びをあなたがたから奪い去る者はいない。」そうイエス様はおっしゃったけれども、これも弟子達にはよくわかりませんでした。けれどもそれは、イエス様ご自身が十字架にかけられ殺されて、甦らされるということですが、そんなことは前代未聞、想像もつかないことで、イエス様が甦らされて、弟子たちに現われるまで、そんなことがこの世にあるとは誰一人想像もつかない事でした。

◆日曜学校のことももう一度戻りますと、系図の後に、マリアさんからイエス様がお生まれになったことが記されています。霊によって身ごもられ、処女マリアからからの誕生、いわゆる「処女降誕」のことが、新約聖書の第1ページに記されているのです。それで「イエス様がお生まれになった時、マリアさんは幾つくらいだったと思う」と子供たちに聞きますと、「12」と言うのです。知り合いの中に、12歳で身ごもった人があったのかもしれませんが、しかし、マリアはヨセフと一緒にいる前に聖霊によって身ごもってイエスさまをお産みになったと、系図のすぐ後に書いてあります。ですから新約聖書の最初に書いてあることは、本当に歴史の地獄と天国、個人史の地獄と天国の系図をず一つと書いてあって、その後、イエス様の奇跡としての誕生が記されているのです。

◆「奇跡」は、如何に賢い人が如何に考えても納得がいかない事です。これはその人が本当に地獄に落ち、本当に復活し、その人が自分の現前に現れない限り理解もできなければ信じる事もできません。ですから、聖書の第1ページにマリアさんの名前が出てくる聖書が、これこそ命と言っていることは正に「奇跡」なのです。ですからイエス様が、「今はあなたがたも、悲しんでいる。しかし、わたしは再びあなたがたと会い、あなたがたは心から喜ぶことになる。その喜びをあなたがたから奪い去る者はいない」と言われ、この言葉を残されて一人十字架の道に進まれるのです。そして弟子たちにおっしゃった通りに、弟子たちに現れて、そして弟子たちが本当に復活、再生するのですね。この間から同じようなことばかり申しあげるので、わたしたちの今年の主題聖句にヨハネ伝から取りました。つまりイエス様が十字架のあと三日目に甦られて、弟子たちに現われなさって語られた御言葉です。「あなたがたに平和があるように。父

がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす。」イエス様との関係を否認した弟子たちにイエス様は御自分が父なる神様から託されたのと同じ務めを弟子たちに託されるのです。一旦裏切った人にこの上ない任務をイエス様は託されるわけです。だからイエス様という方は、イエス様を遣わしてくださった神様は、わたしたちの挫折というか、裏切りというか、その事を見通して恵みとまことを貫いて下さる御方という事がこのことでわかります。そのような次第でここに、「今はあなたがたも、悲しんでいる。しかし、わたしは再びあなたがたと会い、あなたがたは心から喜ぶことになる。その喜びをあなたがたから奪い去る者はいない」とイエス様は言われます。わたしがあなたがたに与えるものは何があってもその喜び、信仰といってもよい、それをあなた方から奪い去ることができる者は誰もいない。

◆今日は礼拝の最初に讚美歌 120 番歌いました。読めば読むほどこの詩篇 23 篇が歌う世界の高さ、広さ深さ、長さを思います。神様はわたしの魂を生き返らせて、正しい道へと導いて下さる。これは、イスラエルの人々の人生経験です。弟子たちはそういうイスラエルの信仰者の民の末として生まれ育ちましたが、イエス様の在世当時、詩篇 23 篇の世界から遠のいていたと思います。そのようなことで今日の最後のところでイエス様は繰り返しおっしゃっているのですが、「わたしの名によって願うならばなんでもかなえてあげよう。」このようにイエス様はおっしゃっています。そしてこのイエス様の御言葉は真実です。その事を私たちは経験してきたと思います。だからこそわたしたちは今こうしてここにいるのです。けれど、今申しましたように聖書で証しされているイエス様の御言葉を本当に真に受けているか。もう慣れ切ってしまう、上っ面をなでているだけになっていないでしょうか。

◆本当に自分が実体験したことを話す。それが本当の証しですね。実体験とは、自分が一度死んで、甦らされた経験がなければ、イエス様の復活も分からない。復活は本当です。ここに命があります。それが本当の証しであり、伝道です。日曜学校は本当に元気があるのです。私は毎週子どもから元気をもらっています。「聖書を理解しようと思って新約聖書を 1 ページからノートに書き写しました」と言うのです。宗教改革の端緒になったマルチン・ルター 95 カ条提題」の第 1 条はこうです。「わたしたちの主であり師であるイエス・キリストが、『汝ら悔い改めよ』とおっしゃった時、それは、わたしたちの人生が日々悔い改めであることを求めておられるのである。」日々神様を仰ぎ、イエス様を仰ぎ、御霊の導きを受けてその御言葉を信じて、従う。これは日々のことなのだと言った。私達もそういうプロテスタントの末裔です。もう一度命の書である聖書を読んで、信じて、実体験して行きたいものと思います。

◆お祈りいたします。憐み深い主イエス・キリストの父なる神様。あなたの憐みによって、今かくある事を許されています事を感謝いたします。どうかこれからの日々、日々新たにあなたを仰ぎ、あなたの御言葉を信じ、いかなる困難も悲嘆もあなたに申し上げ、あなたの癒しを、あなたの平和を頂き、世に平和を造り出して行く、その様な一人一人であらしめて下さい。

この祈り、イエス様の御名を通しみ前にお捧げ致します。アーメン。